

インドが教えてくれたこと

柏瀬光寿

2年ぶりにダラムサラのアイキャンプに参加。クリスマスと元旦を1人で過ごす不憫な妻の見送りを受け、成田空港から1人バンコクへ。バンコク空港でトムヤムクン・ラーメンを堪能し出発ゲートへ向かうと、懐かしい面々が私に手を振ってくれる。そう！籠谷先生を隊長とした開空発隊であった。「さあメンバーが揃った！ Let's go to INDIA！！」

今回のアイキャンプでの出来事は、他のメンバーの報告に委ね、私はこのアイキャンプで感じ、学んだことを記してみたい。

### どんな時も笑顔を絶やさない

ダラムサラで是非とも再会したい人がいた。私はその人の名前さえ知らない。5年前、ダラムサラに在住していたとき、いつも最高の笑顔を見せてくれた「乞食のおっちゃん」がその人だ。言葉は通じないが、会うといつも満面の笑みを浮かべ、彼の笑顔が私の右手をポケットの中にある小銭へと導いた。日本に帰国後も、彼の笑顔は写真として診察室でいつも私に微笑み、「笑顔」の大切さや素晴らしさを教えてくれていた。

「もしかしたら、もうダラムサラにはいないのかなあ！？」という思いを持ちつつ、ゲストハウスから病院へ。坂を下りると、彼がいつもの場所にまるで5年間という月日が過ぎたことさえ忘れてしまうように胡坐をかいて座っていた。そして私と目が合うと、不自由な手を上げ、最高の笑顔で迎えてくれた。もちろん私の右手はポケットの中へ。

彼に教えてもらった「笑顔」の大切さをアイキャンプの患者さんへ、という思いで、私は患者さんと接した。私なりの方法は「笑顔＋擬態語(日本語)／ヒンズー語／チベット語」であった。ベットの上で横になっていた患者さんを起こすときは「どっこいしょ！」、検査や処置が終わったときは「ティケ(ヒンズー語で「いいよ！」)」や「ディク ソン(チベット語で「終わったよ)」」など。もちろん笑顔をプラスして。言葉は通じないが、思いはしっかりと伝わったと思った。なぜなら、彼ら(患者さん)が素敵な笑顔を見せてくれたから。

### 仲間を信じる

我々、ダラムサラ隊は慣れた面子とはいえ、76名もの患者さんの手術を3日間でこなすのは困難が予想された。しかし「仲間を信じる」「私たちはチームでやっているんだ」、ということ強く意識し、私にできないことは必ず誰かが助けてくれ、誰かができないことは私ができるだけサポートした。その結果が今回のアイキャンプの成功を導いたと確信している。隊長である籠谷先生は我々の精神的支柱であり、いつも冷静にそして大きな心で、で一んと構えてくださった。岡田先生は足羽先生や今川先生の兄貴分として彼らを引っ張り、足羽先生は手術室で最高のパフォーマンスを披露し、今川先生はどんな状況になっても慌てることなく目の前の壁を乗り切っていた。ナース川邨さんと清水さんはテキパキと私たちの指示に答えるだけでなく、緊張して落ち着かない患者さんの手をそっと握って、手の温もりを通して、その優しい思いを伝えてくださっていた。Pseudo Tibetan 小川君は、私たちがスムーズに仕事ができ、そして

一日の疲れを癒せるよう、朝から晩まで、時には夜中までサポートしてくれた。ムードメーカー安嶋さんは、私たちには安らぎと笑いを、患者さんにはその優しい心を提供し続けてくださった(ときに音の外れたコカリナで)。そして私たちより先乗りして色々アレンジをしてくださった古寺さんのお陰で、無事にアイキャンプが終えられ、帰国することができた。もちろん、テンジンやダワ院長を初めとする Delek hospital のスタッフや Mr. Parmer を中心とした Dharamsala Rotary Club のメンバー、さらには我らアイキャンプ隊のメンバーの 1 人である Dr. Puri らの協力も決して忘れることはできない。誰か一人が欠けても、このアイキャンプは成功しなかったと思う。ダラムサラからタクシーで去るとき、バンコクで関空隊のメンバーと別れるとき、本当に素晴らしい「チーム、仲間」に心より感謝した。たぶんバンコク空港で拝んだ 2008 年の初日の出が証人となってくれただろう。

### 日本代表

手術を受ける患者さんは、術者が Dr. Yasu(籠谷先生)であるのか、Dr. Mitsu(私)であるのか、Dr. Okada であるのか知る良しもない。彼らが分かっていることはただ一つ、JAPANESE であることしかない。我々は日本のパスポートを持った一日本人に過ぎないが、彼らにとっては日本代表、つまり日本そのものであり、良い結果も悪い結果も、すべて日本人(というひと括り)に返ってくる、と思われた。ゆえに最高のパフォーマンスで彼らの期待に答えなくてはいけない、日本代表として。そういう思いで、私は外来も手術も行った。World cup や Olympic で戦う日本代表と同じように、日の丸を胸に抱いて。

### まとめ

「なぜインドへ行くのか?」「なぜアイキャンプに参加するのか?」とよく聞かれる。しかし、明確には答えられず、いつも「何となく」と答える。ただ、ひとつ分かっていることは、「私の人生の教えはインドにある」ということである。ボランティア精神とは離れているのかもしれないが。

最近、読んだ本に次のようなことが書かれていた。

「よく GIVE and TAKE という言葉があるが、私たちの人生は、水を張った桶、のようなものである。つまり何かを貰おうとするのでなく、向こうへ向こうへ水を流していれば(GIVE)、その水は反対側に当たって必ず自分の方へ返ってくる(TAKE)。だから与え続けなさい。」

多くの方々のご支援に感謝し、そしてアイキャンプを通して知り合えた全ての方々に感謝し、そしてインド・ダラムサラに感謝し、合掌。Tashi-delek